

留学史研究の現状について

中里見, 敬
九州大学

中村, みどり
早稲田大学

<https://hdl.handle.net/2324/2328424>

出版情報 : 霞山日本同窓会NEWS LETTER. 38, pp.6-8, 2019-04. 霞山日本同窓会
バージョン :
権利関係 :



留学史研究の現状について

中里見 敬 会員（九州大学教授）

1990 年度、中国人民大学

中村みどり会員（早稲田大学准教授）

1999 年度、華東師範大学

第一部の報告（中里見担当）では、日本における留学史研究の動向、とりわけ 2000 年以降に留学史研究が活況を呈している現状と、その背景にある考え方について紹介した。

留学史研究の成果としてまず挙げるべきは、さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960；増補版、1970）であろう。とはいえ、戦後の長期間、留学史・留学生の研究はきわめて少なかった。研究対象も主として魯迅のような著名人、しかもほぼ中国から日本への留学という一方向に限られていた。

ところが、2000 年頃から留学史・留学生研究にはわかに活況を呈するようになる。その中心となったのは、神奈川大学を拠点とする中国人留学生史研究会で、1998 年 4 月 24 日に第 1 回の会合が開かれた。この研究会は中国現代史の研究者を中心に、思想史・文学史・教育史などの研究者も加えて組織され、次々に重要な成果をあげている。大里浩秋・孫安石編により『中国人日本留学史研究の現段階』（2002）、『留学生派遣から見た近代日中関係史』（2009）、『近現代中国人日本留学生の諸相：「管理」と「交流」を中心に』（2015）がいずれも御茶の水書房から刊行された。

留学をテーマとした学会やシンポジウムも増え、例えば筆者が関わったものとして「清末民初赴日中国留学生与中国現代文学」日中学術研討会が 2015 年 3 月に九州大学で開催された。ちなみに、筆者が中村先生と面識を

得たのはこのときが初めてであり、その後ともに霞山会同窓生であることを知り、今回の共同発表につながった。

この時期の留学史研究の特徴として、以下の点を指摘できるように思う。

- 従来アクセスが困難だった史料、例えば中国の档案史料や、日本の外交史料などを用いた実証的研究が盛んになった。さらに大学等の機関が所有する史料、元留学生やその遺族が保有する史料等の発掘や整理が進みつつある。
- 著名作家や政治家といった個人への関心だけでなく、留学生全体を一つのまとまりをもった集団・グループ、当時の知識層として包括的に研究対象とし、さらに留学という視点から、近現代史・日中関係史に新たな光をあてる研究が増えた。
- 中国から日本への留学だけでなく、日本から中国への留学も対象とし、人的交流の双方向性を重視している。

総じていえば、歴史学、思想史、文学、政治史、日中関係史など様々な分野で留学を切り口とした研究が増え、その成果を相互に参照しながら留学史研究という領域横断的な新分野を切り開きつつあるといえるだろう。実は、中国などからの留学生が、それぞれの分野で留学史に関わる研究にたずさわる例が少なくない。それが日本人研究者を刺激して、相乗効果をもたらしていると見ることもできよう。

こうした留学史研究に通底する考え方として、山室信一『思想課題としてのアジア：基軸・連鎖・投企』（岩波書店、2001）の影響を無視することはできない。山室氏が提唱する「思想連鎖」という視座は、ある思想や制度が、地域や社会を越えて伝播し、社会変革の

原因となることに着目する。思想連鎖の回路としては、「翻訳を含む印刷物、留学、お雇い外国人教師、そしてアジア各地の人々によって組織されたインター・ナショナルな結社などが挙げられる。植民地統治もまたこの回路のひとつと見ることも不可能ではない」という。留学史の研究は、「この回路の具体的分析をつうじて、アジアがいかなる人的・知的交流によって」つながっていたのかを明らかにするものであり、それは日本を含むアジアの近代とは何であったのかという鋭い問いと無縁ではないのである。

第二部の報告（中村担当）では、中国で近年開催された二つの国際シンポジウムへの筆者の参加を踏まえて、主に中国側の留学史研究動向の概要および今後の日中の共同研究が有する可能性について述べた。

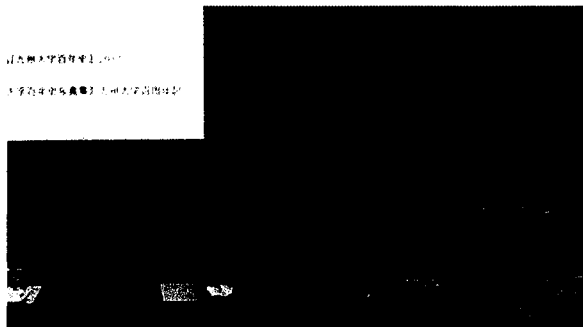
一つ目のシンポジウムは、南開大学歴史学院・同大学中国留学教育研究センター主催による第二回「留学生与中外文化」国際学術研討会（会期：2017 年 8 月 26～27 日）である。1980 年代にいち早くアメリカ留学を中心とした海外留学研究に着手した南開大学歴史学院は、留学史研究の拠点の一つである。同シンポジウムでは、香港、アメリカ、日本からの参加者も含めて 50 本近い報告がなされた。そのうち、アメリカ留学および日本留学に関する報告がそれぞれ三分の一を占めた。中国側研究者による日本留学史研究に焦点を絞れば、アメリカの社会主義的な作家シンクレアの「創造社」を介した中国への紹介、第二次世界大戦中の「南方特別留学生」制度のほか、日本から中国への留学を取り扱った日本の官費中国留学の歴史など、多様な角度からの報告がなされた。

二つ目のシンポジウムは、江蘇師範大学主催、珠海中国留学博物館・西安思源学院・珠海市大成中天文化發展有限公司共催による「紀念鄧小平擴大派遣留學生講話 40 周年」国際学術研討会「留学生与中国的現代化」（会期：2018 年 5 月 18～21 日）である。『中国留学生大辞典』（南京大学出版社、1999）の編纂などで知られる江蘇師範大学留学生与近代中国研究センターは、1990 年代以降中国国内の留学史研究を牽引してきた拠点である。同シンポジウムでは、香港、台湾、アメリカ、日本など海外からの出席者も含めて 50 本近い報告がなされた。「一帯一路」など政治政策に関わる報告もあるが、大半は学術色の濃い内容で、そのうち多数がアメリカ留学を扱ったものであった。中国側研究者による日本留学史に関する報告は、明治維新と日本留学、早稲田大学の清国留学生の革命運動、留学生をとおした日本のプロレタリア文学作品『蟹工船』の受容など、やや従来の革命路線に沿いながらも多岐にわたる内容であった。

これらのシンポジウムの動向の概要をまとめれば、中米関係は現在、政治経済面での衝突が大々的に報道されているものの、実際のところ中国国内では、中国とともに世界の二大大国であるアメリカへの興味は強まっており、アメリカのプレゼンスの高まりが留学史研究にも影響を及ぼしているように思われる。これに対して、中国の近代化と密接に結びついた日本留学に関する研究はこれまで中国で積み重ねられてきたが、現在は欧米留学史研究の流れに押され気味のように感じられた。

現在における日中の留学生史研究の概況を比較すると、中国では政府主導による清朝末期や中華民国期の膨大な資料のデータベース化が加速し、研究対象もより多様化しつつあ

る。国際関係に絡む留学関連の研究には潤沢な研究資金が付与され、今回のような大規模なシンポジウムの開催が可能となり、広東省の珠海では、留学博物館の建設が進行中であるという。もっとも共産党を主軸とした歴史観のもと、一定の枠組みのなかで研究が行われている現状も指摘すべきであろう。一方、日本では、人文系の研究は理系と比するとさほど重視されておらず、若手研究者も年々減少している。しかしながら、この現象を補うかのように、中国国内では扱いにくい「満洲国」や戦時の淪陷区を対象とした研究を志す中国人日本留学生が増えつつある。例えば、日本の神奈川大学で開催されている中国人留學生史研究会のメンバーの半数以上は、中国人研究者によって占められている。



(中里見敬会員〔左〕と中村みどり会員)

中国の留學生史研究における日本留學生史研究のプレゼンスの低下は懸念すべきことであるが、日本で学び第三者的な視点を培った中国人若手研究者の増加は、日中双方の研究をより豊かにする可能性を有している。また日本側の研究者としては、刻々と変化する中国の研究状況に目を向け情報収集に努めると同時に、国際シンポジウムにおいて中国とは異なる視点や手堅い一次史料の分析など研究の独自性をアピールすべきであろう。これらの「知の連鎖」をとおしてこそ、日中は双方向

で補い深め合い、ともに研究を担う次の世代を育てていくことが可能となると思われる。

最後に、今回発表の機会をいただいた霞山会に感謝申し上げたい。シンポジウム当日、中国側からの参加者であり、中国における日本留學生研究の礎を築かれた北京大学の王曉秋先生と昼食交流会の席でお話することができた。その際、お弟子さんである遼寧師範大学の譚皓氏が『近代日本対華官派留學史(1871－1931)』(社会科学文献出版社、2018)を上梓したばかりとの情報を得ることもできた。日中の研究者が協力することで、留學史研究はさらなる成果が期待できるだろう。
